

2024年7月28日（日）第二礼拝「イエス様の再臨の準備」マタイ 24章 32～36節

マタイの福音書 24章、25章はイエス様の再臨の時の教えです。イエス様は初臨の時に私たちの救い主として来られましたが、再臨は審判のために来られます。

第一番目、いちじくの木のとえです。いちじくはイスラエルを意味します。「夏が近い」とは終末を意味します。実を収穫すると秋に入ります。「枝が柔らかくなる」とはユダヤ人のアリア（祖国帰還）を意味します。イスラエルがそのように動き出したら、イエス様の再臨の時が近づいているということです。イスラエルは終末を知る時計なのです。「…人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。(33節)」「…その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。(36節)」この33節の「知りなさい」はギリシャ語でキノスケテ、経験上知ることを意味し、36節の「知っておられ」はギリシャ語でオイデン、直観的に知ることを意味します。赤ちゃんが約10か月で生まれることは経験上知っていますが、その日時までは分かりません。同様にイエス様の再臨の時期は予想できますが、その日時は神様だけが知っておられるのです。

第二番目、神様と親密な人はイエス様が戸口に立っていることが分かります。「…あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。」(Iテサロニケ5:4) イエス様の初臨は救いのためでしたが、再臨は審判のためです。ソドムとゴモラが滅ぼされる直前、神様はこのことを神様と親しい関係だったアブラハムに伝えました。同様に私たちが主と親しくなる時、主が来られる時を悟ることができるのです。「…これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。(34節)」この時代とは七十年、八十年のことですが、1948年(イスラエル独立)や1967年(エルサレム奪還)から計算しても、主が来られるのは近いと分かります。また、不法がはびこり、愛が冷たくなっている今、終わりの陣痛が既に始まっていることを知ることができます。

第三番目、再臨のための心の準備です。再臨の時になされる審判から救われ、神様から称賛を受けるためにマタイ 25章では三つのたとえを教えています。十人の乙女の話では賢い乙女は灯に油を備えていました。いつも聖霊に満たされ、日々悔い改め、御言葉を求め、祈りの生活が大切です。次にタラントのたとえです。主人から五タラント、二タラントをもらった者たちはそれで商売し儲けました。しかし、一タラントをもらった者は主人に対して不満を持ち、それを土の中に隠しておきました。そして主人はこの一タラントのままのしもべに永遠の地獄の審判を下しました。このたとえから、神様を愛し、タラント(賜物)を持って商売し(使い)、儲けたもので隣人を愛することが大切だと分かります。最後に羊と山羊の話です。羊とは、空腹の人に食べものを与え、渴いた人に飲ませ、病气の人を訪ねるなど、賜物を用いて隣人を助け、慰める人のことです。そして、これらの人々にしたことは神様にしたことと同じなのです(40節)。終末の準備とは私たちがいつも聖霊に満たされ、心から主を愛し、賜物を増やし、それを使って伝道し、最も小さい者を助けることなのです。アーメン！